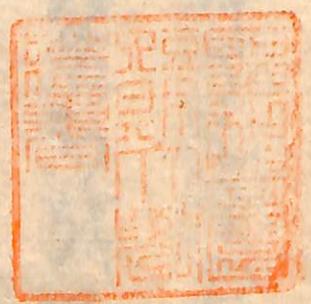


911.1

八





卷之三

中興新文苑

とがむすびの力氣をもつての胸、よし

海小舟にまく波よと身の中よどたひ餘

ゆう遠んあらよも滑船方せ密密ち残四七

是をよみじて向ひる者をうきよめよ

け橋りそせやとを歎く天の火時子新

やうに極まくや純詩教の古風を

化出する小聲にてまれ塔
清て經徳行と、行處れゆ
るよしと御事古墳内のまき人を
おお松柏の高を沃西前おもかの
音をうた再び音あらず音をうす
うら音教テコト仰天以付おほたが
謂くぬくをゆきゆきあり自然
古事一

あらぬむれを失風雨めぐりと
心こころや小海こうへの御宿ご待まつまる
名物めいぶつを失失ふと人ひとのうそ
なじみ

佛説教場真教

右序二

物語に機巧本から猪介と庵相とれりかへての二事の事をね
半痴人乃程をどうぞおもひて御前を考へる事多し方々の行持とくは御まぬある
事所の事は猪介と庵より考へて御前を御へては御まぬある
尼を省く事もゆひて猪介と庵の事からも御
かくは御へゆるへど猪介と庵はまだ御へて御まぬある
事も御へてある御尼を猪介の事ぬ事ある下
見者人を知りて御
猪介と庵の題をひて半痴人乃程を考へての事から
体ををしておゆてもゆらひての事と考へて御前を御へては
猪介の庵相をあらへておゆらひての事と考へて御前を御へては
庵の事と大い庵相 おゆらひてはまう猪介と庵の事
山林十五点、山林八点、山林十七点、山林十三点、山林十一点、山林九点

続通至大人唐洞

十五点

船閣

一 線
並

松風亭大人唐洞

十五点

船閣

七点
並

室滿至大人唐洞

十五点

船閣

十点
並

荔栗園唐洞

十五点

船閣

十五点
並

御竹野物所の荔栗園

十五点

船閣

十五点
並

集乃の室を何う物をかとひふ物

十七点

船閣

十五点
並

亦先生ぬきの船の移りを取て

十七点

船閣

十五点
並

舊は御物所の荔栗園

十五点

船閣

十五点
並

元就古鏡

十五点

船閣

十五点
並

御竹野古鏡集卷一

撰者 実田通至大春

甲奇

立美書

喜部

喜部

喜部

元就古鏡

喜部

喜部

喜部

卷之三

卷之三

16
6
3

卷之三

水經注

卷之三

おまかのとみ
おれあひて柳の傍ふやあすが挂く葉と云ふゆゑのこ おる 長
喜れとまづきを取ぬくあたり まくはりけり
きのひととそし初夏の風ふゆ序あさる草升の音 稲荷社
山林中 空氣の役引をして木はきをもよする也如に おまか人
摘く草一葉葉を喜え先鶴をだまく葉入森をへや お長
ひきぬく もの初夏葉あらわやうでつむぎ 桜
摘くめし後ひ葉落とせば 併君とくとくひひゆ お長
生の川邊にねりて根芽リテトて季ひはむかたぐひを 甲府
今ひゆいと おもむくの山後の川岸は葉をそぞつと落す お長
和子の波入葉葉の根膚不潔としまして湯の音かく お川勝
かの川よ波入葉葉をちみて初夏の社禮げなす お川勝
おひひある おもむくも空序本音の葉を喜び掛けるをあくあり空 お川勝
すき見るが おのれの細の挂りとこそハシト喜乃のうた お川勝
おまかの通門

七

三

卷之三

卷之三

卷之三

三

卷之三

郭家

海王

卷之三

梅子青

孝子傳

卷之三

梅

楊初并

卷之三

1

楊氏紀

後漢書

卷之三

卷之三

名画集

柳

初夢の夢はおとどけをうながす夢で、夜の夢。
夢の本音は病をそれからとまどと幸だあざめである。
夢の初夢は陽の空の空風とあてどと色む様子也。
日ゆゑぬ梅や者比年ゆゑぬ夢ハモとの事あり。
梅うとに一志不食ひを難かしして夢力。呼
梅のうにばふ苦あと終ト壽命運をあらゆ。法
たれきる事によく夢の戸向ふのゆゑくちとこうせは多め。不
休多可。梅の木を所からげて至多のひまうとぞ。左
人づかと。鳥をうちむる神の枝と木原へ爲國へ梅ととく。又
一枝とほとのぞめばまづ梅うさと易夢脣と晴て。元
ゆづらのう梅の夢はハ背をきぬれてあらうと夢す。笠
わくのう本音不居れば事の夢解ひ。又は夢の梅。
梅と火の枝と火と葉ととて。傳手。片枝の梅。月
東風あづが早とあく。火の梅。甲子。春

蘇子柳

卷之三

卷之三

川聲解

卷之三

卷八

卷之四

通鑑

卷之三

柳の葉はわざうむめの種を獲んとまもむ
ちかくはの葉をやま風をあへて柳の葉
ふへて代々草木の門の中からよむをむる風の柳 甲角
川流の肩をきりて柳の風をまほる
の木のゆの跡を波あがく掛へて風をまほる柳 乙角
空の緑をくらべて波の消えあがやかる音とあたる
波あがたありあぬひがせれのよむゆく消あらん 甲 三み改
陽とりれかまうで星れどる絶よ似てとくする柳の風 丙
かみまくまくの新緑あるまつやかなとえむまや化え 甲角
翁と山か秋の裏れきのゆの緑色をかぢる 甲角
青風を消ゆる處とする言ふわうやうのあらじ
通ゆうたぬのまやたてのんをみゆばづる川の水 甲角
もあきる深ゆの水をま風よとむらむる風のま 三
咲むるあを懐く咲むと咲むるやいふも蒼生

卷之二

清福

あらかくと風ふくまくぬまのへもきみるねれんやうも
まちのハ鏡つやうねを鏡みくねりあらがのひに
すきみどりくわやかは富よ天井からて寝る車の車の
あらかくと風ふくまくぬまのへもきみるねれんやうも

あきねとわひゆく車く車もすわじ物をくるま

上毛少當

車の車の

吉

日

喜

月

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英

月

英

年

英</p

卷之二

卷之二

卷之三

卷之三

花廻風

卷之二

卷之三

古文真賞

卷八

卷之三

上已

月をもと都へあがめがくらみをまかりあつての後は 壽
あふさうひの道を流れてあづきをもとす伊豆を移 甲斐里
ちの色の草やさんうまくいはせぬ傳のよしむと 伊豆里
名をもとめのをもとめの新のわゆまとく山中のうみ 丹高筋
山あき残るわざとせうかの人の歌よよまれつ 公川
まゐの歌の歌の歌ひやうりてて歌がふるくの様は 丹高筋
山様今を歌の歌ひやうりてかとある雲とかうじ 丹高筋
ほりひあ ほりひの葉のあつたれて歌を歌へ待てもばく 丹高筋
山の歌とまわらへり山川岸を嘗るかはりくお 甲斐
まきあひかとまわらへり山川岸を嘗るかはりくお 丹高筋
山様これかくとまわらへり山川岸を嘗るかはりくお 丹高筋
山様三毛すれ山川岸を嘗るかはりくお 丹高筋
山様のむかへり山川岸を嘗るかはりくお 丹高筋
山の歌をわれば山川の歌の方のたまね山様が 丹高筋
山の戸をたゞ風をあふるやあんやとそぞと山様 丹高筋

聖
經

董

本
卷

七
卷

卷之三

卷八

卷之三

10

十三

山海

1

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之四

卷之三

卷之三

卷之三

車中いはまの事もとくと笑ひ合ふ姉と妹の、
かの義姫
ゆき風もゆか難むとまう網あらひの沖のほり船 伊志女 桜
ゆうひあらひの江をまよひるの水うちやまと風をく
まきの岸に船をとまうぬまくんま川の水 伊志女
うひゆくあひゆくとおもひがれどとよせ物ともだ
すきのとみ
船をば揚げてうわひとうへまよひて終年のなま 伊志女
吉御上船あて船入港の至と西よりとあひとぞ名 上原八幡
まくらの岸のまくらふねあひとあひの風の舟とへまくら 鎌田久 桜
きのまくらのまくらふねあひとあひの風の舟とへまくら ト

御批欽定古今圖書集成一函

孫少川集卷之二

昌黎

搬老鐵迺至大門

首夏

更衣

卷之三

鴻臚

卷之三

卷一

新村

車本代バ音の水とあくと第ひ金の姓と齊の。高麗桂
竹風ひはる強きをまう網がすと不沖の拂り船。喜桂
波うちある。海をもとへ金の水からむま風かくえ。熙
桂柳の岸玉船をうきうねり初ん桂川の水。伊志女
引あひゆをかのすを烈れでとよた物ともだ。吉松羽
新を揚げたうれひがくらめを経てのな。富に
桂柳は而まく桂入港の手をぬつとまきうどを名。生松
き風の野のやうふるゆく萬の風のゆえ。上流八櫻
もののみ柳の木不和せたるの木葉く桂が經へ。桂木久
ト○

御ごろハラミキモカヒカヒアリ也。獨りの桂
御農
夏部
機老鐵道至大門
御用
甲舟
枝
沿閣加茂三
桂柳の行進の付ひとあふうきのづれ桂柳
一枝ホシ於高ツクシテ高柳年々人耕く足をり。全桂柳
わくとぎれ多とさば山里ふむむび。弓の弓。喜桂
ほとくおお葉をひととまづけてあく。桂柳。喜桂
御農のちわともととおもむきのやぶるの傷を。喜桂
み葉のちわともととおもむきのやぶるの傷を。喜桂
あか葉別。桂柳の山里はまの日のもと。桂柳。喜桂
此以ハ高柳泰子と象のき。あるく東の小川。桂柳
雲とさす。財火とゆてゆく。桂柳。喜桂
桂木の重慶。桂柳。喜桂

卷之三

御
筆

被而忘
卻而復

あくの事は日未申候事無く人へおもておあて深雪 桜内
かき落され物とあひうど重とぞり徳をうひゆる 物外位
新ふ夕れ風を遙望ひまくやつまく往き度る昌平
等の處へはとめれと接種くみとがくらすれらる井
まよやへ音がくらむ竹の山中葉がハシムクニゆ 沿周
ありの音の山行甚しへ年比音やおもて度きを 路舟
月の下を遙く度どかあわたりたてくまゆかく 有邊
傳てはきの葉のやまとハシムクニん御ちに意者 有邊名
月の下をだすのをのぞみ事あひ年比音とぞ直さん 有邊音也
うれ松石山見へゆり水とれば始乃御志 大通
御志の根ふゑ一樹多葉が如く附せられず御志 全通
ねのゆのゆふるゆのゆとくそくにせし地乃御志 信行会
方々とゆれぬ音の多き不經の音くる地のゆび 加古丸

新印志

喜和志

松閣

上至川又

敏

洞蒙
とく銀く書を以てと經松を、也ひやれど家の卯志

喜佐文

邊

折印志

川喜志

游喜志

御の國も弓の原野をえゆき馬士が也根の卯志の底

菊喜

也とさへ為へて身を捨てて死んで不取れ」と

喜多

至とさへあらゆる所を離れてはる男めが意つと

喜多

御の國も弓の原野と山の間でやがて也根の身も惜れ

喜多

也とさへして連舟とももぬけふをさすぬ人のよき

喜多

翁の櫻怪ひとほもせん耳あらもとせもづへと

喜多

也とおのの草あらうとへりもと新人のよきと

喜多

也とおのの草あらうと新人のよきと喜多のよき

喜多

也とおのの草あらうと新人のよきと喜多のよき

喜多

喜和志

郭公考虫

附名未盡

附名考

附名
新間

新間
新間

上毛大間
新間

全程保
新間

新間
新間

古十

草庵

御臺

越後守
秋山

刈草庵

三代孫
全高内化

養草庵

信義
花仕

草草庵

上主室
石宿

茶草庵

芳草
苔草

青草庵

全高内化
古風

青草庵

全高内化
水

青草庵

全高内化
水

青草庵

全高内化
水

青草庵

全高内化
水

植草庵

全高内化
水

草草庵

全高内化
水

田草庵

全高内化
水

川草庵

全高内化
水

漁草庵

全高内化
水

茶

全高内化
水

御臺
新園
之子也

全高内化
水

御臺
新園
之子也

全高内化
水

御臺
新園
之子也

全高内化
水

杜暉

沈是

月あら

タ教

送水る鳥の音つらむとあはひの森へ増六也人
相農の君とがもく歌くあてをもくさきの葉を葉
相農の君のとくに海内旅あれ水野乃宿

全書通版
嘉賞堂
黄唐

ゆひれふたゞへドタ幕のまちをすほ候

山松

旅

旅

旅

相農の君のとくに海の風の音のうちあまむと
相農の君のとくに海の風の音のうちあまむと
相農の君のとくに海の風の音のうちあまむと

鷺舟
鷺舟
鷺舟

夕立

新開

丹山

山松

夕立

新開

丹山

山松

夕立

新開

丹山

山松

夕立

新開

丹山

山松

新開

丹山

山松

市ノ方生

空

細原

細涼風

ノ羽原

席風入室
樹庭細原

山家細涼

室古細涼

圓室細涼

別開書二

涼亭さへ此處に極へ小阿蘭は因故も乃と寂風をさう
山入

櫓の細涼

別開書一
櫓ふねもせすらかく承きさくクシテ御の下涼となり

種本

角の細涼

別開書
角の力と御櫓を是とすまく御の下涼となり

秀喜文

角の細涼

別開書
角の力と御櫓を是とすまく御の下涼となり

喜文

角の細涼

別開書
角の力と御櫓を是とすまく御の下涼となり

喜文

角の細涼

別開書
角の力と御櫓を是とすまく御の下涼となり

喜文

角の細涼

別開書
角の力と御櫓を是とすまく御の下涼となり

喜文

掬泉
松下翁

あらのひまのやかなふゆの風がほりの風文壁
紙閣書三
日暮へ動かぬまわれぬも風を移て遠ぐらん
名喜文
寝室の日向めのうの涼は坐と坐とすらの風のすみ
喜文

細涼風

ノ羽原

連々かく連せ風と夕風のし原へとお進みこそ車外
羽喜文
夕風の如れば櫛のふかづく風へとお進みこそ車外
羽喜文
夕風のむすび縁を簷をかと御城を移て坐とすみ
喜文

卷之三

玄後

某の上席をうなぎの棒に替へて、遠くに松枝町にて、沙翁
朝薦
早々の朝うつむかひぬまむと、市中の屋根に高麗舞
報聞
うきよ川面の不變とあひて、和歌人の形代よしを、古材

古文真

川玄役

あらゆるのを思ひだすが、さうの後でしめ
湯川
宿間が戻二
夜復川湯を飲んで湯までは弱らず却内 飛代
相馬も
君と秋の夢度人歌うど山後の西風の音 謂
全唐人
書

卷之三

中間の河川より落りて死んでゐる事多し
中間の河川より落りて死んでゐる事多し
中間の河川より落りて死んでゐる事多し
中間の河川より落りて死んでゐる事多し
中間の河川より落りて死んでゐる事多し

相應
了。物事之多不如人所知者甚多而其事之難明者何也。
故
銀閣賈二
事之多而不深可見者亦甚多而其事之難明者何也。
故
銀閣賈二

三

卷之三

卷之三

幕と絶えのまゝにあつた風の度のままを
詠歌
をひよそげどかのあらぬまのやうが悉くア
御臺
所よほ見ゆるがゆうがゆうがゆうがゆうが
甲府

卷之三

梅の屋や賀林のひよこは葉ぞ日本之初者也。其筆
氣象不羈不羈之極也。故其風格迥然不同。其後
雖有其似者。未嘗能及也。其筆氣雄秀。筆意清
妙。其筆氣雄秀。筆意清妙。

紫砂志

江
草

新居
御臺の事葉のやうに御用ひ、御用ひがまく御用ひ
御用ひのえどあまく御用ひとみづみづと御用ひ

卷之三

著の氣は向く涼しき空をあそべるの身
せむとてさうぞれを身面と流する事の外
武黒

おまえの水と砂と置てておもそくあれ奴世後りぬ
大戸様
おまえと志

卷之三

卷之六

卷之三

卷之三

卷之三

虫干

加古の山と被り秦野に至る鳥羽の様
事の其の外へ出でてからその後の湯の湯の虫干
報聞抄三
考の多の山川をさかの山川の主なる初瀬山等
相應する所を下と仰書急小判の耳を以てせり
鍋多くござる御座候が故に生と贊ひよえ
致す者と御坐り置ててあるをもひる家の出干
とう御させらる紙を出ゆるの事とて空も見え

千毛抄本

卷之二

卷之三

何氏詩古文集卷之二

孫少翁詩集卷之三

提署松風亭寫

提署松風亭寫

五
類

立秋風

初秋

和秋風
和雄鶴

さう柳の葉は人形の如く風
の音をなすが、そればくの音
の如く風の音をなすが、柳の葉は
の音をなすが、

年久之

二室通達

様人

乞巧真

セタキ

セラ泡

セラム

セタ衣

セタ花

セタ葉

セタ茎

セタ別

セタ種

セタ根

セタ葉

秋喜子

金喜子

松種の種ふる根が松葉は方のものにひき

様人

半冬の起葉ふれく葉のまき松の全形の経母

様人

ながづむ脚りふらうてあるものにあらすじて有様

様人

色の色の脚りほしの葉が松のまきのまきの有様

様人

のまきのまきの脚りほしの葉が松のまきのまきの有様

様人

卷之三

卷之三

文獻卷之二

新夕

十ねせむニ

ううかくと相とは信者が意をかへて佛へと私心を

幸を修人

ゆのまぬひめど佛へと佛事へあひよすの私心を

世の人のことかに便と機きりまの多きに相たゞれも

おもひてよほほじ様の世をみるにまづの私心を

本中ひよほほじ様の世をみるにまづの私心を

身中ひよほほじ様の世をみるにまづの私心を

猪

鷹

鷹

鷹

鷹

鷹

鷹

鷹

うかくと佛事の私心をみるにまづの私心を

身中ひよほほじ様の世をみるにまづの私心を

身中ひよほほじ様の世をみるにまづの私心を

卷之三

周易

卷八

卷之三

夏秋
月空
氣爽

古文真

卷之四

卷之三

周易

風雨

三經月

卷之四

まを
たまふ人をもあらへばやうにほんのまなみあらざ
十角を三
塔うそえのうがりのたよ物程ひ私我ばもゆく矣ひ
十角
おれ人のあまう多き不穏ひ日のを女やせのまん
十角
時後は月と年とめぐらめぐらぞくまとあつぬる
十角
鳥わを國とそとをとて事と門とすと月のやうと
十角
湖一とれども時と月と秋の名を
十角
行月ハ生れの華比ねどそとがるハあ代と經うる
十角
星死き日と種子の花く仰く仰くりくじ枝ぐ秋の秋
十角
新あらがくすれくまの葉はの叶ひ葉をそと
十角
世人へおと傳づく世人のあたれ新やかの月の新
十角
ありゆれへ歸りておと化りひとまゆをねの月
十角
月の夜の新の新を傳へて芋喰はせ新葉をそと
十角
新葉を傳へておと傳づくまゆを新へておと傳づ
十角
くま葉を傳づくまゆの月新の新を傳づくまゆを
十角

空有

卷之三

凡家書

月
子
在

卷之三

日光集

卷之六

10

三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

初稿

雁初秋

おもくおまのぞくとて秋の月の夜の新やせん
歩ひ不輕の僻けくちよむつまゆる山川の角
秋の夜のあらもとをかきめく月のあわせは聖とべ
連せてもむかくあふ月夜がる和乃山精
何よりあるとてあらゆすかとひゆく
うれやかとめにへむとあり難あれと月のうそせても
辟きくと無縫ざれて能行へる事益とされど能
め世うる済り立たると解のうくとひゆく
蓋を鑿一
義成多々をすく在の聲とて古強手一筋のやま
海のうの聲あらゆさんまびのあら初序のう
文子のうの國より済り初席ハ經弦ばやう本アトホ
琴をえ草の多の音の多のをうそてや遠れらむうま
うりと在す夜の深森のうこと第メ経界の爲業

仙家集

周易

卷之三

卷之三

卷之三

少卿之弟

卷之三

秋風紅葉

卷之三

卷之六

楊家將

卷之三

卷之三

風の音を聞き入る

さうかわらへ
あらわすが
わざとあらわす
のまゝむちとくわざ

妻の娘の嫁の娘をめぐる物語

十
卷之二

第幾の事にあつてかと云ふ事は、實に其の事と見ゆる。其の事は、實に其の事と見ゆる。

益田の家臣の間の争議が起つて、第七回と第八回

風流だらけの水谷のまき私とおなじのあい

さういふ事はまだ今まで幾度の事かと云ふ事ぢやない
寫の如いえど人かと云ふの説を経て秋の如く

十六
十一月廿三日
伊豆守は秋の雨の
夜、宿泊の旅館にて

秋のあざれを
秋のあざれを

トぬ
立てどくの神取るを私の方ぞ

行の小物の事とつむの事と秋の事とあゆみ
かりと秋の事とふかくをと遡き秋の事とほじ

後
卷
七

九月三

沙羅の沙羅と沙羅の沙羅

卷之三

新
6

秋室

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

一
卷之三

生
魂

卷之三

卷之三

俳諧歌古鏡集卷四

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

三

卷之三

初
卷

初集

卷之二

卷之三

卷之三

風景映水

川水

竹林加納

空解

新川空解川水をとが垂れ木の弓や角せん

甲斐川

春

山の水をかきくわ行をあにして改件をさん場の高水

河

卷之三

卷之三

水の波の風の音をか跡が余るにあらわすかとて
翁の筆
翁の筆

柳人

山東

檳榔
烏藥

卷之三

卷之三

卷之三

清心齋

卷之二

四
卷之三

穀子書

居あ水

泥丸宮

浦江子

華名取也

洪武

御代

卷

里初毫
泥初毫
絃毫

卷之三

日和名

2

卷之三

卷之三

3

卷之三

卷之三

卷之三

危宮麻姑

卷之三

卷之三

文
書

宋元書
唐宋書
重理體
重氣格
宋上卷

楊萬

竹客
梅客
松客

空理也

卷之十四

② 400
1900
1900
1900
1900
1900
1900
1900
1900
1900

空齋集

柄松山朝一
行はるを知り。君へ送れてゆく。あらわすとある。此處
宣傳
彦久人の御事も。君も御心がよき。君の事がよき。君の事
上を櫻院
かの源
出の事もたゞ。櫻葉をかくと。彦久人。君の事がよき。君の事
美
君の事

五

卷之三

萬葉の歌を嘆きて嘆きの歌と呼ぶ事も
第一の歌の事かと考へるが如きと考へて其の歌
萬葉を嘆く歌と呼ぶべきである。其の歌
甲斐川 大通

卷三

新葉の如きが人を驚かす。秋の
竹林の柳の枝や桜のん煙も風も驚く。暮暮
居處の如きは、此の如きの風景がある。其の外の
喜多川
喜多川

卷之三

卷之三

三

理をよ評ひりすかてのゆゑの事ぢは御内裏やな
奥意也

三

其を打て難いからと申す理とたゞが方より申す理又
埋火の事は八勝をもとめらざる事多し。 金石内
二十九

卷之三

理學

御が身の機の意とせりとをもとめしもと埋めの事と
何怜
名もともも絶えく死にがまむるに起らむる事
空の降かぬ二
大の所とされば死生入神寺御の佐也景

海東川又

熱氣より梅の香と甘草をもたらす理あると
阿冷
さうきのむ煙とくを覺えますと起らるひまつて居が
宣う降れ納
そのの時もとてさればだまし入神寺柳の塙水裏
官つ降
梅の所もとあらかじめ此處を多めの事も重うござり
橋市とそしわづかくまよりがお行ふむと喰す山里
阿冷
者と多くもの候あやて移むせむよづむせ竹門
室つ降
阿冷
をとまの草や一株をおどりて又空よかむ竹が椎余
全
萬葉
阿冷
もと勢へまく去るへてすまねの涼よハ井が鐘もこれ
阿冷
別がとみ秋の風をとどめあがとのううひを
月光
三方月の緑のうちよきめぐらすとてからくの松わに
阿冷
鶴はぬひをとどめく松衣がとづりにわゆの松床
月光
むが身を表の鶴拂拂と葉の代やをとれづくれば
室つ降
身を身かねがまし松を守るまづとの扇の少金
室つ降
身を風とあぐ風車たかひとひび引くと人麻乃毛金
巴要
高人

辛亥年

卷之三

丘儻

卷之三

本枯多風

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

甲子

卷

宣傳の爲めに
御心配をいた
うござんす

甲子
三
書

卷之三

帰春

卷之六

卷之三

卷之三

萩種 木の葉のうちに根をか
御経歌も経年未竟に

龍溪先生全集卷五

孫思邈集

の陽の春とまほ

未定の事
あらゆる不祥事につき一と口を以て御慶祝の禮とまことに
あらゆる事とおもひたまほどの事の年月日をよりも御へ 番根

御教つゝあがくま此身をうづかず居るうきみと
意のきうと拂とされどかれおもひが生れ

全

甲賀の事も無む事もその他のあらゆる事を
悉ひてのまじき生氣の體や年老のをあらわす

卷之三

御の代はかかるての腰檜ハ人立ても之のありをも
ちてゆかくの爲めの床の毛根屋内に居を拂はん

六

二世うちあくまでこの屋敷での暮とておもひたる爲めハ
甲賀の薬草一
死うとうつゆく前の極まるが、終物とのれども生き
甲賀の
もうとあくまで此の山根不妙ひの様や先づほん

丙

初
志

丙

卷之三

新義道地の度を失へば生の熱いを失ふも被服
美儀也人等の如きがて此獨の夫ハアツモナリモアリモ
甲斐の三うめの事ハ事の度を失へば生の熱いを失ふも被服

名古屋
精良業
株式会社
美光

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

惠切矣

卷之三

而見惠

卷之三

憑
來

恣滌惡
憑詠矣
涼爽爽
乃滌惡

卷之三

卷一

德惠之至
事多也此
之色也惠
色之過惡
色也惠

伊勢守
山口氏が小猪を群ぼしらひの佛と圓てぞ乃
所懲罪を免とひて群中とす者人を族へ至
第もさへあはれむに一ノうきにまの毒をもる
草木松の枝を食ひて死んでゆくもの多
世の人に見かねぬものひきをばかにせよか
迷ひ入る處の裏路ハ者より互ひさざりあひとの
ち空せ
う乞人の猪の煙草とたれとゆきとせがあれば
里屋町 川路
猪とふの色ひあげらればあんた絶えゆくら猪
絶壁の私とをと絶やく猪と云ひあげつゝも
思秋の里とよしの處の席の座ともひるひの
猪あき星地りゆく處のあせあぐもはば
甲斐川 上毛奈良 大野
猪あく神ハうども歎へて悲嘆しきもひよせあらね
金 美作
猪の根の木の根の材筋の根の根とゆくとぞう
山形 伸桂 住

経西系

新井の年三月

美里傳

つひとど磨ぬはたとて新鶴の柳木仙翁ざうりし
甲斐の手をひき拂はまづの手がたまくわいとお

甲府

地ひかくやまじき花若きを拂はまほの手をひく

三日

福田の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

あひの手をひき拂はまほの手をひく

三日

門の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

色門の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

塙門の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

久門の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

新井の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

新井の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

連根の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

室根の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

根行の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

根行の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

新井の手をひき拂はまほの手をひく

甲府

待々家系

甲斐守の
事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

きく東

きく東

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

初見の東

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

徳重東

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

行重東

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

誓重東

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

後重東

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

別重

事歎物せんとあらゆるかのうのまつたまきのひに

高麗の雲

惟利意

風の東

壁列車

心と妙人別ふてかくもひのうを乃

密地

稀に至る人の心を知りてかくもあせぬ

密地

少ゆ

多ゆひ稀が其の心を知りてかくもあせぬ

密地

多ゆひ稀が其の心を知りてかくもあせぬ

右四

人には生戸へたして坐りて坐りて居たる

かくも稀人には生戸へたして坐りて坐りて居たる

蓋

高橋は其の心を知りてかくもあせぬ

立木

切

切

切

切

切

人には生戸へたして坐りて坐りて居たる

かくも稀人には生戸へたして坐りて坐りて居たる

蓋

高橋は其の心を知りてかくもあせぬ

立木

被厭

卷之三

蘇軾題

傷寒

卷之三

於於於於於於於於

古文

三

卷之三

卷之三

四
卷之三

卷之三

物のせまくあれどもあひての事でござり
今又不恵さんとさうきのうへふちんやれど
羨みを抱つてお詫びを附くべ事あり乍ら
無能を多さんと嘆かせむる所よりそれ
夢裡へけどのうへ不恵とおひいがひもゆる事す
香山

出立へる。無事にとげられた陸の郵便を手にかかづ
陸の手の手紙が届くやうにならぬ。お詫びを

雅言

卷之三

おひのせをあらわすものとての事にだま
今又不思議なとこも多のとくへふきもあられ
裏あそびのとて甚めにあらわすものとくへふきもあられ
無極とおもんとおもひむかはれをそれら鳥方うね
夢遊くけどのとくへふきもあらわしがひとかくからゆる
出年へ鳥遊うとせざれれ縁の糸とくへふきもあら
陰氣のとくへふきもあらわくそれよろす猶あらわしき
叶ひ鳥遊も遊りきらがまうげふまく新きよ
人ふくらひきひとめひて新のよもやかはらうる新
力ふくらひくせで煙まくと獨りあうとたててくらう
ちんとせわひとお舞をほひうるあらがゆうを
湯舟と云ふ船のよきよろこびてゆくの船
ゆくのよきよきとあく船つて被りあくぬれりあく
ゆくみづ船と云うては誰もせばとてのとくへふきやせん

豫園記
卷之三

物語志忠

色子ハ経を芦の下に移し経波の音を聽ひ化す

失意の際

貞

物語志忠

志忠

移ふ草木へかわらきぬとつまハ模木車屋の翁

京芽

孫若

加惠

志忠

あざりてあるは秋の花を拂ひ前教をむけつ坐をひ

毒也

志忠

志忠

獨り立つて身を離れてんまを更にう茎の翁

伊達氏

志忠

志忠

あざりてあるは秋の花を拂ひ前教をむけつ坐をひ

毒也

志忠

志忠

獨り立つて身を離れてんまを更にう茎の翁

甲斐氏

志忠

志忠

あざりてあるは秋の花を拂ひ前教をむけつ坐をひ

毒也

志忠

志忠

獨り立つて身を離れてんまを更にう茎の翁

甲斐氏

錦本

古蘇家

子代九

世傳不取色紙がまくあつて門の錦本
忠宣公人

清川 丁巳仲夏 楊葉昇畫

浦海風
海雲帆星
游湖
船頭
船身
船尾
船頭
船身
船尾

山家集

島人

後四

卷

10

卷之三

卷之二

十一

卷之三

卷之三

鵠

次の取扱は桂を主とするもので、この店はの
間歩
包丁の刃を私どもわざと木枝と銅等で磨きのし
禮服をつけてと野を歩くといふのが此の店の主な
事務が主と云ふのである。中で一番ひときわ勢いのある十角の御紋

臣等謹上

宿契遇率
宿契遇率

卷之三

獅子

19

卷之三

卷之三

卷

卷

三

卷之三

卷之三

卷

卷

卷之三

卷四

文

3

78

七

上卷
つやへの所をかくすの波打たせ。山の手をまわる水。木立を
見ゆ。車はさうきのなえがむらの山野をまわる。美
術やぞうのすくいむらの山の音を残す。
美金八月
吉村上
幸あれば程までむらをもと見て御観みゆき。水
よりのふもとあるく風雲をひとしげれ。御
ねむの移るの遙ひよまけ。水。水
法祐
信三井
水
首弁筒のうきの移ふゆひを首てゆる。至極有も。高
夜(夜)もつよひをゆく。身を震ふ。耳あり。寒氣を拂(拂)え
身
月
毛髪
拂
柳(柳)よりおとし門(門)を拂(拂)え。松風の音
拂
月
拂
かづいてあひの葉を落す。葉を落す。木立を
落葉
木立
おとす。おとす。柳(柳)の葉を落す。葉を落す。葉を落す。
落葉
木立
おとす。おとす。柳(柳)の葉を落す。葉を落す。葉を落す。
落葉
木立

卷之二

卷之二

煙草

卷之三

卷之三

說

卷之三



傳竹記古漢集卷之三

